方向

第一二二号　一九九〇年一一月二〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

歌人・大塚五朗（一三）

1990 11 1　原田憲雄

大和国原

一九三一年　五郎、三十四歳。京都府立京都第三中学校教諭。京都府葛野郡太秦村安井に居住。

『山原』の「京都在住時代―その二―」はこの年の作品である。

冬晴れ

白雲を天（あめ）にはかけて比良が嶺の見のさやけさよ年たちかへる（元旦二首）

人の来ていひ行くことのよろしさよ我世の年も新たなりけり

昭和五年十二月廿六日岩見護氏と共に雲母坂より比叡に登り、横川に至る。

山を負ひて冬あたたかき麓村家毎に花をもてる枇杷の樹（一乗寺にて）

山の道を昼深く来てうらさびし陽が一ぱいに照れる向山

陽の照れば陽の照るさびし山の道を昼深く来てわれの嘆ける

一面の枯草山を登り来てわれ茫然と仰ぐおほ空

今朝をはれて限なき空のはるけさよ国の境の山に雪来し

田ゆ落つる水もいつしか凍るらむ七日の月の空にかゝれり

日竝〈けな〉らべて降りつぎし雨の今朝はれてみればつくづく青き北空　（山原　一四三―一四八）

如　月

春浅き空のますみに風ありてヴェンチレーター廻る静けさ

春もやや静けき空となりにけり諸木の枝の張りのゆたかさ

喉青き鵜の鳥一羽鳴きゐたり二月の空の晴れて明るき（動物園にて二首）

春浅き大地を踏みておぼつかな白き孔雀は尾をひろげたり

いちじるく心たかぶりてありにけり待つに甲斐ある春となけれど

春雨の降るをけうとみ籠りゐの今日出てみれば萌えしばらの芽

山城の広つ国原真陽はれてまぶしき春の梅咲きにけり

比良が嶺に雪つむみれば接骨木の梢は寒し芽はもちながら　（山原　一四八―一五二）

この四月、後に弟子となる原田憲雄、また後の一艸舎の同行（どうぎょう）となる杉田荘作、高田益雄らが京三中に入学する。

大　和　国　原

昭和六年五月、生徒を引つれて大和に遊ぶ。

つのぐめる芦の新芽のひそやかさ雨もつ雲はややに動ける（小椋池三首）

一様にかしぎなびかふ芦の芽に朝降る雨はまこと閑（しづ）けき
いつしかも雨はれゐたり岸のべに芦の新芽のならぶあはれさ
山道にかかる麓は朝はれてとぼしけれども桐の花咲く
桐の花咲けるを見つつ行く山の雨霽れ空はややに明るし
谷深く吹き来る風はひとところ山吹の花をゆるがして吹く
大和路は五月半の風ありて麦の穂の上に見ゆる青山
手にふれて莢のふとりの親しさよ菜種畑の初夏の風
ひた丘に菜の花さかる裾原は明日香の宮のそのあとゞころ
たたなはる八十の群山萌えそめて大和の国はまこと初夏
整はぬ蛙の声の昼もなく大和の国は夏さりにけり
丘に立ちて思ひはるかなり飛ぶ鳥の飛鳥の里にわが来つるかも
飛ぶ鳥の飛鳥の丘にわが立つや国原は晴れて遥かなるかも
来てをみつさらさらさびし大和野に誰が焼きすてし野火の煙見ゆ
野火の煙一すぢ見えて大和野のたそがれ近き空の色かも
かぎろひの夏の陽ざしはうつろひて耳成山に落つる夕影　（山原　一五三-一六一）

高野山

昭和六年八月四日より十日間紀伊国高野山に滞留す。宿所は金剛三昧院の別棟である。

いきのちの命はさびし紀の国の高野（たかの）の山にわれは来にけり

朝庭に咲きて静けきつゆ草のほのかに霧ははれそめにけり

忽ちに降り来る雨か部屋ぬちにしぶきは運ぶ土の匂ひを

遠山の上に雲ゐて昼深し蜩の音もひそかなるかも

十方に光あまねき真昼間ひぐらしが一つ鳴けるあはれさ

向山に細々つゞく道はありて時雨の雨の降りてぬらせる

向ふには幾重の山のうち続きいよよ寂しく陽は傾きぬ

深々とさぎりぞこむるあかときの人の声こそあはれなりけれ

幾谷を越えて来しかも山の村にまひる小馬の嘶きにけり（大字大滝に遊ぶ）

現身は現身ゆえ（原文のまま）に寂しからん山には山の風吹きにけり

一本の萱草ゆへ（原文のまま）に山道来てわれはさびしき息はきにけり

さびさびと時雨ぞ通る起き出でてわれはつめたき水のみにけり

心妻心に持ちて登る山のねむの花こそあはれなりけれ

雉子も鳴き松雀（まつめ）も鳴きて朝山の空青々と晴れにけるかも

深谷を幾重越えつつ下り来て聞くはかなしき人の声かも（相の浦にて）

馬追は庭に来鳴けり明日ははや家路かへらむ心せはしき　（山原　一六一―一六九）

秋　来　る

大文字の火ぞ燃えさかる夜の空に流れてしるき秋の風かも

夕蝉の声なきやみてあはれなり空に燃え立つ大文字の火

青空にひねもす渡る風のあり天気予報の旗ひるがへる

昼も鳴く虫のあはれさ山畑に南瓜の花は実となりにけり

住みつきて家居わびしも自ら花をつけたる庭の山茶花　（山原　一七〇―一七二）

五郎の第一歌集『山原』の短歌作品はこれで終る。『山原』の書誌については刊行のところで述べる。

わたしは三中に入学して一年と二年の二年間、大塚五郎先生から国語と漢文を教わった。たいへん厳しく、むしろ恐しいといったほうがいいくらいで、ことに文法の時間は、指名されたら、すぐ立って動詞の活用を言うのだが、間違えたら、竹の笞がびしりと机に鳴り、鋭い関東弁の叱責がとんでくる。自分が当たらなくても、いつそいつがやってくるかしれず、つくづく学校が嫌になって、なんど止めたいと思ったかしれない。あのころは登校拒否などは、家庭でも、社会でも、許す雰囲気などまったくなく、げんに外の連中も「獰猛なゴリラ」と呼んで恨みはしても退学するものはいない。わたしもがんばって通り抜けるほかはなく、二年の終りまでに、文語文法の活用を身につけた。そうして嫌な国語・漢文が好きな学科に変わっていた。後に漢文の教師になろうとは夢にも思わなかったが、危なっかしいものながらそれで身過ぎができたのは、「獰猛な」先生のおかげである。

春夢女史の文と南子の歌（四）　1990.10.6　原田憲雄

六、近代詩人中野逍遥

宮沢康造氏が「漢詩人中野逍遥―人と作品―」（『独協大学教養諸学研究』第二十二巻・一九八七年）でわたしの説を次のように批判しておられるのを、さきごろ二宮俊博氏から示されて、はじめて知った。

嘗て原田憲雄氏は「中野逍遥論」付記で、無名のかれを郷土の名士として観光資源とすることにふれ、「中野逍遥は、しかし、おそらく郷土詩人ではなく、郷土を捨てて近代詩人となったひとであると思われる」と述べているが、「郷土を捨てて」の表現に納得できない点がある。逍遥の心に郷土がなかったと言えるであろうか。南豫逍遥子の心は、晩年まで郷土を離れることはなかったと考えたい。

宮沢氏は答えを求めておられない。しかし氏の文によって、拙論が意図を十分に説明しえていないことを反省した。ここで補足しておきたい。

拙論「中野逍遥」は、その「一」で「明治文学に占めるかれの特異な位置は、さまざまな感想を誘う」といい、「付記」の結びに、「日本文学史がその名を逸するならば誤りであろう」というように、日本文学史においてのかれの位置設定を目指していた。それは、たとえば藤井乙男『日本文学史要』（一九三九年）、次田潤『日本文学通史』（一九四二年）、藤村作『国文学史総説』（一九五四年）などに中野逍遥の名も見えない、といった状況、また、「かれの名はまだ特殊に属し、出版の洪水のなかに、数冊で収まるだろうかれの全集が加えられそうな噂も聞かぬ」（拙論・一）といった一九七五年の状況を前提としていて、一九九〇年の今日でも、全集が出な

いことにおいては同じである。それではわたしは、中野逍遥の位置をどこに測定するのか。漢詩で恋愛をうたうという希有な作業を通じ、「日本の詩としての生命を失う寸前の漢詩に、おのれの生命を充填して、爆発させ、そのエネルギーによって儒教に縛られた明治人の感性を帝王切開し、近代日本語詩を生み出させた、奇異な創造的詩人」（拙論・八）とし、「郷土を捨てて近代詩人となったひと」と考えるのである。

「近代詩人」とはいかなるひとをさすのか。これを正確に定義するには、まず「近代」を定義しなければならない。『哲学事典』（平凡社・一九七一年）は「近代精神」の項に、①人間主義、②科学的合理主義、③人格の自律、を上げ、この三つが近代精神の核心だ、とするのは簡潔である。地域によって現われに違いがあり、核心のすべてが同時に現われるとは限らないが、一つでも著しく突出するとき、「近代」の徴候を認めてよいであろう。この三つに、わたしは「疎外の意識化」を加える。さきの事典にいう。

> ある存在が、自己の内にあるもの、自己の本質であるものを外化し、自己が外化したものを、自己自身の他者として、自己にとってよそよそしいもの、自己に対立するもの、自己に離背するものとしてみなすこと、をいう。

共同体に生まれ育った個人が自律しようとして、共同体とのあいだにトラブルが生じたとき、個人を生み育てた共同体を、個人のほうからおのれに対立するものとし、共同体のほうで意識しなくても、個人のほうで「疎外」と意識すること。これを「近代」に著しい特徴と見てよい。家族・親戚・地域・友人・派閥などを共同体と見なしてよく、それらを「郷土」と置き換えて差しつかえあるまい。中野逍遥にとっての最も密着した郷土が宇和島

であった。

逍遥は「明治廿五年八月郷に帰」り、たぶん九月、「郷を発つ」。その詩に、

十里の家山われを容れず、また狂骨を抱いて征途に上る。…ああ人世読書子となるなかれ。

という。「家山」とは郷土のこと、ここでの家山は宇和島であって、このとき郷土宇和島は逍遥を「受け容れない」もの、かれとは対立するものとして、かれに感ぜられ、かれはその郷土を出発したのである。

郷土がなぜ逍遥を受け容れなくなったのか。おなじ詩に、

美人泣いて訴ふ百年の恨み。

とうたうのは、それがこの原因であることを語っている。「美人」は、かれが「可憐子」などとよぶ幼馴染みで「婚約者」でもあった女性であろう。逍遥はすでに南条貞子に恋しており、結婚の相手としては貞子以外は考えられないような状態にちかく、帰郷の際、「可憐子」との「婚約」の破棄を図ったのであろう。それは逍遥の人格の自律にとってやむをえないことではあったが、「婚約者」にも、「婚約者」を逍遥にあたえた郷土にとっても忌まわしく悲しむべき事であった。「婚約」の正式の破棄はたぶん次の年の八月で、このときは郷土が逍遥に翻意をもとめた段階ではあろうが、かれの心はすでに決まっていて、郷土を異物とし、対立者と見、その「征途」は郷土を捨てる旅を意味した。

逍遥は「明治十九年」帰省するために「七月十四、東京を発し、十六日神戸に着き」そこでの詩に「慕はず烈士万古の名」「卓識たれか説かん百年の後」とうたった。百年の後に説くべき卓識は願っても、共同体の与える

「烈士」の名声は不要だとするので、自律の姿勢は、二十歳のこの青年にすでに著しい。しかしかれの心情が郷土と結びついていたことは、宮沢氏の論に説くとおりで、さらに例をあげるまでもない。ただ、かれがもっぱら郷土宇和島を歌う作品は「郷を発つ」までで、「明治廿六年八月帰郷中」が郷土をうたうといっても、「この身燕雀と儔（たぐひ）するを恥づ」といい郷土の人々への「決別」が主題なのである。

郷土がかれに与えた学芸は漢文であり、朱子学であった。東京に出て、近代の学校に入り、西洋の言葉を学び、西洋の文学や歴史を学び、ドイツのシルレルを敬慕したというのに、近代の大学で選んだ専攻が漢文だったことからしても、郷土がいかにかれの本質をなしていたかが伺われる。しかしかれは、郷土の与えた漢文と朱子学をいちおう受け入れながら、その漢文のなかで、朱子学ことに日本的厳格主義によって変形した道学が嫌った、稗史小説を愛読し、みずからも小説を書こうとした。

漢詩を生んだ中国は、きわめて人間的な文化を築いたが、詩で恋愛を歌うことは抑圧してきた。儒教的官僚主義と家族制度が恋愛を危険視したからである。日本の歌は恋愛が主要なテーマであったのに、日本人が漢詩を作るときは中国の顰みに習って恋愛の流入を避けた。のみならず明治に入って欧米に遊び、恋愛あふれる欧米の詩に学んで、日本語の『新体詩抄』を編んだ近代の博士たちも、頭脳にしみこんだ儒教はすすぎがたく、その『新体詩抄』に恋愛の片鱗もなかった。

近代以前に生きる人は、友も妻も共同体から与えられる。みずから選ぶことはできない。人格が共同体の内に包みこまれて自律していないからである。逍遥はいう。「友を択ばば高世の士、妻を娶らば絶代の人。識見俗寡

を超え、学問凡倫を圧す」と。かれはみずから友も妻も選ぼうとした。かれには郷土が与えた「妻の候補者」があったのに、郷土とはかかわりのない南条貞子を愛した。それは郷土には許しがたいことであった。逍遥は郷土が許さぬひとを恋人とし、郷土の与えた漢詩によって、敢然として恋愛を歌った。そうしてそのあげくにかれがかちえたものは、失恋であった。失恋とは、おのれの恋がおのれの異物となり対立者となることで、やはり疎外の一種であろう。これよりのち、逍遥にとっては失恋を嘆くおのれさえが、おのれの異物と化してゆく。

逍遥子は国家の蠹魚、道路の昆虫にして、…　（上毛漫筆）

死せば則ち骨を碓氷・妙義の麓に葬むるは、百年の志願なり。（同）

道学の人これを読まば、まさにその喪心を笑ふべく、法教の士これを誦せば、まさにその迷溺を罵るべし。あるひはもって愚となし、あるひはもって痴となし、もって狂となし、もって乱となさむ。而して逍遥子、眼無く、耳無く、口無し。（同）

破鏡収まらず人起たず、故園帰らんかなを賦するに処無し。（上州羈旅　感傷十律　三）

十年の学問益無きを愧ぢ、一代の文章愚を飾るに堪へたり。（偶感）

逍遥の郷土は、郷土を捨てたかれをも愛した。かれが死ぬと、郷土はかれの骨を碓氷に埋めず、宇和島に葬った。逍遥百年の志願は、南予子の異物として疎外したのだ。大學の師重野成斎は、成斎を尊敬せぬ弟子にも寛容であった。逍遥の遺稿を編むために、郷土詩を中心とする若干首を選び、墓碑の文を作る労を惜しまなかった。逍遥が血涙を流し心肝を注いだ恋愛詩篇は、たぶんほとんど削り捨てた。成斎は、逍遥の恋愛詩篇を、弟子の異

物とみなしたのであろう。師が弟子の知的郷土とするならば、知的郷土もまた逍遥を疎外したのである。

漢詩の祖『詩経』には、恋愛の詩がある。道徳的解釈を加えて恋愛の詩でないと強いたのは儒教である。逍遥が恋愛をうたったのは『詩経』への復帰ともいえ、ルネッサンスがギリシャへの復帰であると同時に、人間主義によって近代の初めといわれるのを思い合わせると、興味ふかい。逍遥は、恋愛に促され、儒教で縛られた漢詩で恋愛をうたい、その人間主義によって漢詩を『詩経』の本来に復帰させ、表現の自由を解放した。しかしそのためには、かれが郷土に背き、郷土に容れられなくなったというにがい疎外感を代償にしなければならなかった。生前死後にわたって逍遥を愛した〃郷土〃にとっては不本意きわまりないであろうが、これが近代の悲劇なのだ。

中野逍遥が、明治の他の漢詩人と決然として異なるところは、宮沢氏のいう「郷土詩人」が郷土を捨てることによって「疎外」の意識化を漢詩でなしとげ「近代詩人となった」ところにある。それが、日本文学史が、十九世紀と二十世紀の境目に中野逍遥の名を書きとめなければならない理由である。「郷土詩人」としてのかれは、他の漢詩人とほぼ同様で、日本文学史のこの時期に特筆する必要はない。この説明、納得されるだろうか。

『遺稿』の正編に「失題」があり、外篇に聯環体の「失題十首」がある。「失題」というのは諷喩の詩であって、おもての意味とはズレたところに作者の真意をこめる批評詩である。「失題十首」の第十にいう。

大造なほ聞く玉輅の巡るを、また似たり謡を聴いて下艱を察するに。三尺の堯階天よりも高く、一部の舜典移して民に施す。北辰天極玄武を開き、東皇日辺青文を画く。枢密院静かにして春は年のごとく、中に彩筆頌を艸する人あり。

西方院茶堂六松庵

1990 11 12　原田　慶

十月十八日。六松庵が落慶してのお茶事に招かれ、主人と一緒にお相伴することになった。わたし達は、茶道についての何事も知らないのだけれど、お茶事ということに、わたしは以前から興味があったので、この機会をいただいたことはとても有難かった。

扇子、懐紙、袱紗、茶巾などという物を準備しなければならないらしいが、赤谷紀美子さんが、みんな用意してあげるとおっしゃったと聞き、安心して出かけた。

西方院は唐招提寺の塔頭で、本山からすこし離れた西の丘の上にある。赤谷明海先生もこの寺の住職をされていたことがあり、生前には、現在の院主石田智圓師ともたいへん親しかった。明海先生の墓地はこの寺にあって、夫人の紀美子さんは、毎月ここまでお参りに来ておられる。

わたし達は京都駅から近鉄電車の橿原神宮行きに乗り、尼ヶ辻駅で降りた。線路を渡ってから、電車の進んだ方向へ家の間を通り抜けると、大きな池の傍に出る。垂仁天皇陵の堀である。電車は次の駅が西ノ京で、唐招提寺は尼ヶ辻との中間くらいの所にある。御陵の堀は池のように広く、たっぷりと水を湛え、ヒシの葉の枯れ残ったのがまだたくさん浮かんでいる。陽ざしは明るく上天気で、「帽子を持ってくればよかったなあ」「日傘がほしいくらいですねえ」と、まぶしさに手をかざして辺りを眺めてみると、堀の傍の畑には、夏の花が咲き残っていた。堀の中に小さな島があって、何か祀ってあった。それは田道間守の墓だそうである。

香（かおり）も高い橘を　積んだお船が今帰る

……

遠い国から積んで来た　花橘の香とともに

名は香るたじまもり　たじまもり

小学校の三年生くらいの時に田道間守の伝説と歌をならった。

堀が終ると道は田の中へ入る。堀の下の方に、小さな池があって、そこに、こうもり傘のようなのを頭にくくりつけた人が釣りをしていた。道は少しずつ下り坂になり、線路の向こう側に唐招提寺の森が見える。田が終って広い屋敷の家に変わり、何軒かの前を過ぎると、道は線路にだんだん近づいて行き、両方がほとんど肩を並べるころ、唐招提寺と西方院の丘とを結ぶ道に突き当たって、わたし達の歩いてきた道は終りになる。左へ線路を越えれば唐招提寺、右へ登れば西方院である。坂をあがった所の右上に西方院の山門があり、道は唐招提寺の奥の院へ続いている。道に沿って西方院の築地がながながと連なる。風雨にさらされた土塀が痩せ、土の中に積み込まれていた古瓦の出ているのがおもしろくて、古都奈良らしい自然のおおらかさを感じさせる。山門には「石田智圓」と表札が出ているが、それも薄れてすこし見えにくくなっていた。「ああこれは、赤谷君の筆やな」と主人は立ち止まって眺めている。

西方院は鎌倉時代に慈禅上人の開かれた寺だそうである。由緒書きには次のようにいう。

慈禅坊有厳（一二六一―一三七五）は、嘉禎二年（一二三六）東大寺大仏殿に自誓受戒を行じた「南都四律匠」のひとりであ

る。寛元二年(一二四四)宋に渡り、在宋三年、律宗と念仏門を学び、宝治二年(一二四八)律宗三大部を将来したと伝えられる。その後、西方院を創建し、斎戒衆として念仏を修した。

わたし達が山門を入って玄関に近づくと、赤谷紀美子さんと明海先生の弟さんの夫人樋崎まさえさんが迎えてくださった。紀美子さんは、わたし達の分までお茶事に必要なものをすべて用意していて渡された。ご挨拶をして、待合いにあがってお茶をいただいていると、お正客の杉田荘作氏夫妻が見えて、一同が揃った。この六人が今日招待された客である。後で、友人に本を借りて読んだところ、一会の茶事の成立することを「一座建立(いちざこんりゅう)」といい、この客を選ぶことが、主側の最初の配慮であると書いてあった。利休七則にも、「相客に心せよ」というのがあって、一座隔意のない人々・同好の人々を組まねばならないということなのだそうである。主人とわたしは、お茶について何も知らないのだから、どなたと相客になってもご迷惑なことになるが、招かれたこの方々ほど、わたし達に寛容で、親切な人があるはずもなかった。杉田さんは、六松庵移築に力添えされ、赤谷先生と主人とは、杉田さんと古くからの知人だったようで、杉田さんが自宅にお茶室を開かれた時にも、二人は森田曠平さんとともにお招きを受けた。樋崎さんはお茶の先生、紀美子さんは明海先生とともにわたし達の頼りにする夫妻で、ここに招かれたのは夫妻のご縁であった。

一同が揃ったところで本堂に移り、読経ののち、明海先生の墓所にお参りし、智圓師が六松庵落慶の報告をされた。境内には唐招提寺中興二世證玄の大きな五輪塔、徳川五代将軍綱吉が帰依した護持院隆光の五輪塔、綱吉の生母桂昌院の帰依した蔵松院英範の宝篋印塔などがある。丘の上なので山草もよく育つらしくて、ショウジョ

ウバカマの大きな株が目についた。

いよいよ六松庵に入る。六松庵はもと伊藤博文の茶室だった。それが三井家へ、そして久世家へと渡ったのが大震災以前のこと。古くなったので取り壊されようとしていた。そのことを偶然に西方院の院主夫妻が、旧知のひとから知らされ、文化財保護の意味からも移築したいと考えられた。吉村怜氏の「六松庵由来」に、

かくして院主勇断して昭和六十年春、飛鉢して材を運ぶ。

とあるのがおもしろい。どんな鉢を飛ばして材を運ばれたのだろうか。

しかし運ばれた材も、四年ほどはそのままになっていたらしい。再建するには、高度の技術がいるが、そのような人を見付けることができなかった。たまたま杉田さんが明海先生の墓参にゆかれ、ご自身の茶室を建てられたときの数寄屋匠滝本匡志氏を紹介されたのだそうである。滝本氏は長いあいだ西方院に泊まり込んで仕事をされたという。不思議な縁で生き返った六松庵であった。

久世家は代々黒田藩の家老の家にして六本松に住するにより六松庵と称せり。……博文公ゆかりの江戸間有楽斎風の茶室に、京間数室をそえて一屋とし、西方院観音講御尊像を祀りてこれを茶堂と号す。

と、さきの「由来」にあるように、茶室の外側の壁の小さな龕に観音さまがおいでになる。

本堂の東の六松庵の庭に入った。ここは腰掛露地というのだそうで、濡れ縁のような所に、竹の皮で編んだ円座があり、竹の皮の草履にはきかえて、円座に腰掛ける。庭を見ると髪飾りのような可憐な花のみだれている辺りがひときわ明るく、奥にゆくとササリンドウがそっと咲いている。山草らしいものが、ほんの数株ずつほどよ

く植えつけられ、唐招提寺の森で枯れていたという古木の輪切りにされたものが、飛び石のように並べてあったりして、なんとやさしい心づかいだろうと、みんな感心して、庭の風情を楽しんだ。

どんな合図があったのか気がつかなかったが、席入りをする。ゆっくりと飛び石を渡って、正客から順につくばいで、手と口を清める。一杯で左手と右手、次の一杯で、左手に少し受けて口をすすぎ、残りでひしゃくの柄を洗い、もとのとおりに鉢石に掛けて置く。樋崎さん、紀美子さんに一つずつ教えていただいてするのだから、これだけでも難しい。草履を脱いでにじり口から入り、後ろを向いて草履の裏を合わせ床下にもたせかけて置く。部屋に入ったらまず床の間の拝見である。扇子を前に置いて礼をして軸を拝見する。わたしは礼をすることを知らなかったが、後のお二人のされるのを見ていると、自然で、美しい作法の身についておられるのはやはり感じのいいものであると思った。次に釜を同じように拝見する。軸に向かって恭しく礼をするのは、筆者の人格に対して敬意を表するのだそうである。

拝見が終って席に着くと、院主夫人の静さんが挨拶に出られる。そのあと一人ずつ礼を返すのだそうだけれど、全員で同時に挨拶してすましたように思う。静さんもお茶の先生である。じつに明るくたのしげな人である。白足袋の足をすっすっと運んで懐石のお膳を捧げもってこられ、各々が両手で受けて捧げたまま主客ともに礼をする。お膳の上には大小の黒塗りの椀、向こう付けはピーナッツ豆腐だということだった。

みんなの膳が揃うと「どうぞお召し上がりを」といわれて、ご飯の大きい椀と汁の椀の蓋を両手で同時にとって、大きいほうを仰向け、その上に小さいほうの蓋を伏せて重ねて、膳の右横に置き、箸をとって汁を吸い、ご

飯を食べる。他の人のされるのを見ながらしているから、わたしはだんだん遅れてしまう。ご飯のほうは、ムカゴ飯がお椀の底に一文字に三口ほど入っている。汁椀のほうには焼きナスの具に味噌汁がほんの少し入っていた。

静さんはけじめをつけてきちんと動作されるが、生真面目な若々しい女学生のような顔が、たちまちにこにこして明るい声で話されるので、とても楽しい。ほんとうは決まったこと以外は話してはいけないらしいが、あまり堅苦しくならないようにとの配慮らしい。

「今日は、特別にきちんとして、杉田先生を驚かせてやろう、原田先生をおろおろさせてやろうと思いまして、こちらもいろいろお勉強をいたしました。こんど若宗匠が、わかりやすく漫画で書いた本を出されたので、うちの住職さんは、夜、お布団のなかでもそれを読んだりしまして・・・」

などとさわやかな標準語で話されるので、何ともうれしくなって、こちらもにこにこしてしまう。

松茸の土瓶蒸しは香りがよく最高の味である。お酒が出されると、向こう付けのピーナッツ豆腐に箸をつけてもよいのだそうである。それからまたご飯が出て、二杯目のお汁をいただく。たいへんなご馳走で、里芋の空揚げ、ほうれん草と松茸のお浸し、柿とさんど豆の白あえ、生麩の煮つけなどが大鉢に盛り付けて出され、それぞれを皿に取り分けていただき、あいた鉢はきれいにふいて拝見するのである。

後日、わたしも柿の白あえを作ってみたが、このときのように美味しくはできなかった。

もう一度、ご飯と香の物が出されたが、今度は湯漬けにする分を一口、椀の中に残しておくのだそうである。

海山の物が出て、主と客の間で盃のやりとりが行なわれる。千鳥の盃というらしいが、正客と主のあいだで行な

われていた。わたし達はそういうことを知らなかった。後で「箸洗い」というご飯のお焦げで作ったお湯が出て、これを二つの椀に少しずつ入れて、椀をゆすいで飲み、紙できれいに拭きとって、お膳を返して終りになった。

「こんなに立派なお茶事には、なかなか出会えるものではありません」

と杉田さんが言われると、静さんは、

「何をさし上げようかとみんなで考えたのですが、柿の白あえはぜひめし上がっていただきたいし、子ども達はやっぱりほうれん草は食べていただかなくっちゃあ、なんて申しまして」

と話された。

どれもほんとうにおいしかった。智圓師は精進料理の名手なのである。

懐石がすむと、中立（なかだち）といって、いちど外へ出て腰掛けて待つ。その間に部屋を掃く音が聞こえていた。しばらくして鉦の音が聞こえると、入りなさいという合図らしい。客は庭にうずくまってその音を聞く。みんなしゃがんでいるのは何となくおかしく、わたしが不思議そうな顔をするので、紀美子さんはにこにこされた。聞き終ると、ふたたび正客から順に、つくばいで手と口とを清めて室内に入り、濃茶をいただくのである。まず床を拝見。さきの軸が生け花に変わって、ジュズダマとホトトギス。杉田さんが「ほほう、虫食いですな。これをさがすのがまたなかなかでしたでしょう」と言われた。茶花というのは自然の姿をたいせつにするものらしい。香合は、外国産の果物の皮を乾燥させ内側に絵具の金色を塗り込めたもので、夫人の手作りということだが、古めかしい色合いで、とても今出来のものとは思えない。扇子を前に置いて、礼をして拝見する。二度めだ

から間違えなかったが、身についていないことをするのはやはり、何か奇妙な気持がする。濃茶の時には、待つあいだ扇子を自分のうしろに正客の方へ向けて置き、自分の番になると、扇子を前に置いて、前後の人に挨拶をしてからいただく。わたしは扇子を前に置き直すことを忘れてしまった。

濃茶がすんでから、隣の部屋に移りお薄である。こんどは扇子など使わず、ただ普通にいただけばよいというのでほっとした。智圓師も出てきてお話をされる。

この部屋の天井は、真、行、草というふうに変化をもたせて造られ、網代の部分と、細い煤竹の部分と、萱の茎を使ったような部分からできている。材質によって、乾燥度や、風に対する反応が違い、すこし気候が変化しても音が変わるということで、わたし達がいた時も、天井がミリミリと音をたてた。

茶碗、風爐先屏風など「頂きものが多いのです」との院主の話に、

「やはり、物はふさわしいところに集まってくるものですなあ」

と杉田さんが言われたので、なるほどと思った。

みんなの目にとまったのが、釜の蓋置き。金属の細い柱で三角形のものだったと思う。小鳥が止まっていて可愛らしく、珍しい品だと、口々にいった。静夫人の東京の友人が、六松庵落慶の祝いとして特に贈られたものだという。これを見て、わたしはアンデルセン童話のナイチンゲールを思い出していた。

昔の中国の王様が、自分の城の森に住むナイチンゲールの歌声を聞いて、その美しさに感動して涙を流した。それから年月を経て王様が死の床にあったとき、ひとびとはすでに王様は死んだと思い、次の王の所へ行ってし

まった。一人で死神にさいなまれていた王様の所に、かつて城から去っていったナイチンゲールが帰ってきて、美しい歌声で死神を退散させ、王を死の床から救ったのだった。元気だった日に、美しい歌声に涙を流した王様の純粋な心を、本当に知っていたのはナイチンゲールだけだったのかもしれない。

この蓋置きを贈られた方は、どのように考えてこれを選ばれたのかわからないが、心をこめた贈り物だったにちがいない。

わたしどもの所には、風流な品は似つかわしくないが、それでも亡くなった母はお茶が好きだったから、古い茶碗が幾つかあるし、最近、東京の詩人から、手作りのお茶碗をいただいた。わたしはさっそくお茶をたてて友達にも出したが、母のすり減った茶筅を使っていたので、その友達は「これではお茶は立たないわ」といって、新しい茶筅を二つ持ってきてくれて、そんな古いのは摺り鉢の掃除につかえばいいといった。もっともではあるが、母が幼い孫の道子を相手にお茶を楽しんでいた茶筅だから、摺り鉢の掃除につかう気にもなれない。

こんなふうに風流を知らないわたし達ではあるものの、人の心のやさしさや振舞のうつくしさは身に沁みて感じる。わたしにとってこの佳き日は、なんど思い出しても、温かく、楽しい一日になった。

名残り惜しい気持で、院主夫妻の山門でのお見送りを受けて、わたし達は西方院を辞した。杉田さん夫妻は自動車で帰られ、わたし達四人は、いろいろと話しながら連れ立ってまた垂仁天皇陵の傍を通り、田道間守のお墓を左に見て、尼ヶ辻駅へとゆっくり歩いて帰った。こうもり傘を頭にのせた人は、相変わらず、同じ場所で、まだ釣り糸を垂れていた。

教えの旗印 —法華経巡礼 53— 1990 10 25 原田憲雄

3-33. もろもろの力と禅定と解脱と、幾千万無量の三昧があり、
この車はこんなに広大で、それに乗って楽しむのだ、仏の子らは。（93）
かれらはこれで遊びながら過ごす、幾夜、幾日、幾半月、幾月、幾季節、
また幾年、幾アンタラカルパ、幾千万億カルパをすごすのだ。（94）
宝玉つくりの乗物は広大であり、それに乗って覚りの壇に行くのである、
あそびながら、多くのボサツ、スガタの聴衆の声聞たちが。（95）
いまこそあなたは知るがいい、ティシュヤよ、第二の乗物はどこにもない、
十方のあらゆるところを探しても、人間の最高者の方便を除いては。（96）

balāni dhyānāni tathā vimokṣāḥ samādhināṃ koṭi-śatā ca nekā /
ayaṃ ratho īdṛśako variṣṭho ramanti yena (W:yeno) sada buddhaputrāḥ //93//
krīḍanti (W:krīḍanta) etena kṣapenti rātrayo divasāṃś ca pakṣān ṛtavo 'tha māsān /
saṃvatsarān antara-kalpaṃ eva ca kṣapanti kalpāna sahasra-kotyaḥ //94//
ratnā-mayaṃ yānan idaṃ variṣṭhaṃ gacchanti yena (W:yeno) iha bodhi-maṇḍe /
vikrīḍamānā bahu-bodhisattvā ye ca (W:co) śrṇonti sugatasya śrāvakāḥ //95//

evaṃ prajānāhi tvam adya tiṣya nāstīha yānaṃ dvitīyaṃ kahiṃ-cit /
diśo daśa(daśā) sarva gaveṣa-yitvā sthāpetv'upāyaṃ puruṣottamānāṃ //96//

「ティシュヤ」とはシャーリプトラの名である。（96）の「探す」の原語はgaveṣで、gava(牡牛)を望むの意、禅宗の「十牛図」が連想されるおもしろい言葉である。

3-34. あなたたちはわたしの子、わたしは父、あなたたちを危ない所から救い出した、
幾千万多数カルパのあいだ焼かれていたのを、恐るべき三界から。（97）
このように、わたしはそのとき、涅槃を説いたが、あなたたちはまだ涅槃せず、
輪廻の危うさから解放されただけ、いまや仏乗を求めるべきだ。（98）
ボサツがここにいるならば、すべてわたしの仏としての教えを聞く、
これがジナの巧みな方便、多くのボサツを導くもの。（99）
劣った、嫌うべき愛欲の中で、衆生が楽しみにふけっているとき、
真実を語る世界の導師は、この世における苦諦を説く。（100）

putrā mama (W:mamā) yūyam ahaṃ pitā vo mayā ca niṣkāsita yūya duḥkhāt /
paridahyamānā bahu-kalpa-kotyas traidhātukāto bhaya bhairavātaḥ //97//
evaṃ ca haṃ tatra vedāmi nirvṛtim anirvṛtā yūya tathaiva cādya /
saṃsāra-duḥkhād iha yūya muktā bauddhaṃ tu yānaṃ ca(W:va) gaveṣitavyam //98//

ye bodhisattvāś ca ihāsti ke-cic chṛṇvanti sarve mama buddha-netrīm /
upāya-kauśalyam idaṃ jinasya yeno vineti (W:vineti) bahu-bodhisattvān //99//
hīneṣu kāmeṣu jugupsiteṣu ratā yadā bhont'imi yatra (W:atra) sattvāḥ /
duḥkhaṃ tadā bhāṣati loka-nāyako ananyathā-vādir ih'ārya-satyam //100//

「苦諦」とは、この世界は危機のうちにあるというブッダの説いた真理をいう。いわゆる「四聖諦（ししょうだい）」のひとつであり、ここでつづいて「集諦（じったい）」「滅諦（めったい）」「道諦（どうたい）」についても説かれる。

3-35. また、無知で、苦の根本を見ない、愚かな者たち、
かれらに道を示し、欲望が起こるときに苦が集まり生じると説く。（101）
「欲望を滅ぼせ、つねに執着することなく」これがわたしの説く第二の滅諦。
かならず人々を解放させる道、それを修行して、解脱者となる。（102）
何から、シャーリプトラよ、かれらは解脱したのか、非在の執着から解脱したのだ。
だがかれらは完全に解脱したのではなく、導師のいわゆる「涅槃ならず」である。（103）
解脱している、とわたしが説かないのはなぜか、無上道を得ない人たちを。
無上道によって人たちを安楽にするのが、法王としてこの世に生まれたわたしの願いだ。（104）
これが、シャーリプトラよ、わたしの教えの旗印、最後に、いま、こうして説くのが。

諸天とともなる世界の人々の幸福のため、四方八方に宣布せよ。（105）

ye cāpi duḥkhasya ajānamānā mūlaṃ napaśyant iha bāla-buddhayaḥ /
mārgaṃ hi teṣāṃ anudarśayāmi samudāgamas (W:samudāgatā) tṛṣṇa duḥkhasya saṃbhavaḥ //101//
tṛṣṇā-nirodhārtha (W:nirodho 'tha) sadā aniśritā nirodha-satyaṃ tṛtyaṃ idaṃ me /
ananyathā yena ca mucyatenaro mārgaṃ hi bhāvitva vimukta bhoti //102//
kutaś ca te śārisutā vimuktā asanta-grāhātu vimukta bhonti /
na ca tāva te sarvata mukta bhonti anivṛttāṃs tān (W:tan) vadatīha nāyakaḥ //103//
kiṃ kāraṇaṃ nāsya vadāmi mokṣaṃ aprāpt (W:aprāpy) 'imāṃ uttamaṃ agra-bodhim /
mamaiṣa (W:na me sa (?)) chando ahu dharma-rāja sukhāpanārthāy 'iha loki jātaḥ //104//
iya śāriputra (W:śāriputrā) mama dharma-mudrā yā paśca-kāle mama adya (paścime kāli mayā 'dya) /
hitāya lokasya sadevakasya diśāsu vidiśāsu ca (W:na (?)) deśayasva //105//

（101）が集諦、（102）の前半が滅諦、後半が道諦を説き、（103）で、四聖諦をさとった解脱は、単に執着や煩悩からの解脱にすぎず、真の涅槃ではないことを明かし、（104）で、真の涅槃は、無上道を得たときに成就する、と説く。無上道とは「方便品」で説かれた「一大事」で、すべてのひとに仏知見を開かせ、示し、悟らせ、入らせること、大乗・仏乗であろう。それが仏がこの世に出現するただ一つの理由であり、因縁であるということも、そのときていねいに説かれていた。これが釈尊の「教えの旗印」すなわち「法印」である。